

鹿 1 2 鹿の玉 = = = 猪・鹿・狸より

行者越の一つの家が潰れたのも、実は鳳来寺の衰運が大いに関係したのである。山内に薬師と東照宮を祀り、天台真言の両学頭が並び立って、一三五〇石の寺封を与えられて全盛を極めた鳳来寺も、明治の改廃と数度の出火に遇って、昔の面影はもうなかったのである。

明治維新前、鳳来寺がまだ全盛の頃のことである。山内一二坊中の岩本院で、正月十四日の田楽祭りに、七種（なないろ）の開帳と言うがあった。開祖利修仙人が百濟から将来した瑠璃の壺、竜の玉、熊の角、鹿の玉、一寸八分の朶、浄瑠璃姫姿見の鏡、東照公佩用の鎧兜の七種で、一人一文ずつの料金を取って拝観させたと言う。名前を聞くといずれも珍宝揃いであった。その後如何にな

ったか消息を知らぬが、その中の鹿の玉だけは、岩本院没落の後、不思議なわけに取り残されて、附近の家に秘蔵している。鶏卵大のやや淡紅色を帯んだ玉で、肌のいかにも滑らかな紛れもない、鹿の玉であった。この類のものは、まだひそかに蔵ってある家があって、実は前にも見たことがあったのである。秘蔵者は前



から岩本院に縁故のあるものであった。いよいよ没落のおり、方丈がそのものを前に呼んで、これだけはこの土地に残しておくとして、譲られたものと言う。その一方には、どさくさ紛れに盗み出したなどと、悪口を言うものもあった。いずれにしても伝え遣していたのはめでたかった。

かかるものが、いかにして鹿の肉対中に生じたかは別問題として、土地の言い伝えによると、たくさんの鹿が群れ集まって、その玉を角に戴き、角から角に渡しかけて興ずるので、これを鹿の玉遊びと言うて、鹿が無上の豊楽であると言う。あんな玉を角から角へ渡すのは、容易ではあるまいなどのことは一切言わぬことにして、さてその玉を家に秘蔵すれば、金銀財宝が自ら集まり来ると言う。自分などが聞いた話でも、旧家で物持ちだなどと言えば、あそこには鹿の玉があるげななどと言うた。

狩りを渡世にしたものでも、めったには手に入らぬ、よくよくの老鹿でないと獲られないと言うた。それで一たび手に入れば、物持ちなどにずいぶん高く売れたそうである。前にも言うた行者越の狩人なども、かつて手に入れたことがあると聞いた。

あるいはそれに生玉死玉の区別があって、いかに見事でも、鹿を殺して獲たものでは何の効目もないと言う。群鹿が玉遊びに興じている、それでなくば馱

目だというのである。鳳来寺の岩本院にあったのがそれだと、秘蔵していた老人は改めて掌に取って見せた。そしてこう握りしめていると、自ずと温もりがあって、幽かに脈が打って来るなどと言うてじっと目を瞑りながら、不思議なる脈を聞こうとするような風であった。最後に叮嚀に紫の袱紗に包んで、元の箱に納めると、奥まった部屋へ蔵いに立って行った。

通例玉を秘蔵しているものは、金かなどのように、秘蔵にして、玉があるなどとは、さらにおくびにも、出さなんだのである。そうしてこっそり秘蔵しているものが、案外そちこちの村にあるらしいのである。